

北泉優子

春の海鳴り



の海鳴り

北泉優子



春の海鳴り

定価 950円

発行 第1刷 1979年3月28日

著者 北泉優子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111 (大代表) 振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 1979 北泉優子

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan



目次

薔薇の棘

古都しぐれ

ひとときの夢

春の渚

五月のたそがれ

午後の潮騒

遠い日の風鈴

ふたりの海

絶望の赤い花

迷い坂

優しい裏切り

悲色の虹

希望の朝

265 247 224 203 180 158 134 114 95 72 52 31 5

装帧
難波淳郎

春の海鳴り

(一) 薔薇の棘

やわらかな午後の陽ざしを浴びて、坂道は白く光っていた。片側に並ぶ高層マンションの影が細長く伸び、路上になめ縞模様を描いている。春が間近いのだろう。渡る風が肌にやさしかった。ふりあおぐと、垣根ごしに枝を張る桜に早くも固い小さな蕾がついていた。

重い買物籠を手に急勾配の坂を登ってきた浅倉千津子は、枯葉色の外壁がまだ新しいマンションの前まで来かかって、ひと息つくように歩みをとめた。坂の上のマンションに住んで五年余、歩き馴れた道だったが、三十を超えた年齢のせいだろうか、近ごろは途中で一呼吸置かないと少々きつい。

立ちどまると、ほのかに花の香がした。すぐ鼻の先にある花屋から漂ってくるらしい。

新築マンションの一階は商店街だった。軒を列ねるのは豪華な雰囲気、売物の高級店ばかりで、一介の会社員の妻にすぎぬ千津子など所詮高嶺の花、道すがら眼の正月をさせてもらうのが関の山なのだが。

ただ一軒、花屋は例外である。駅前の商店街にくらべたらかなり割高だが、その分鮮度がよく、評判をきいてわざわざ遠くから足を運んでくる客もいるほどだ。常連とまではいかなかったが、彼女も利用する一人だった。

明日は十回目の結婚記念日、思いきってばつと散財しようか。

往きがけに思いついたものの、つい勿体なさが先に立って迷っていた千津子は、花の香に誘われて、花屋へとむかった。

店内へ入ると、彼女はまっすぐに薔薇の群れを目指した。

薔薇は中央の円型のひな壇に二段で並んでいた。どの色の花もきゅっと蕾がしまり、葉もびんとして瑞々しい。

千津子は真紅の薔薇を買うつもりだった。赤い薔薇には忘れられない思い出がある。いや、薔薇を心の支えにして十年を生きてきた、といったほうが適切だろう。

十年前、千津子と浅倉太一は、永井信輔ひとりを立ち合いに、ふたりだけの結婚式を挙げた。浅倉家の猛反対にあつて、人並の披露ができなかったからである。

鎌倉きつての素封家で代々医者の家業とする浅倉の家に、次男の嫁といえども水商売の女を迎えるわけにはゆかない。それが理由だった。

千津子は酒場で働く娘だった。早くに両親と死別し、幼い妹を抱えて生きてゆくためには、収入の多い酒場勤めをするはかなかったのだ。しかし、酒と脂粉の浮かれ稼業にはどうしても馴染めず、いつもおびえたような表情で客の相手をしていた。が、そんな素人っぽさが気に入られたのか、彼女が目当ての客も多かった。そのなかの一人が、太一を伴ってきたのである。

太一は初対面の時から、酒場の女としてではなく、普通の娘として接してくれた。それが千津子には何にも増して嬉しく、彼に対してだけは心を開くようになった。太一も、ひたむきな瞳をまっすぐにむけて、けなげに生きる彼女に、心惹かれた。

やがて、ふたりは愛しあうようになった。だが、境遇のちがいが厚い障害となって、結婚へとひた走るふたりの行く手を阻んだ。境遇を楯に拒まれるのなら、太一を諦めるしかない。思いつめた千津子の心中を知った太一は、親を捨て家を捨て、彼女と生きる道を選んだ。

そして、結婚式の当日、貸衣装ながら純白の花嫁姿となった千津子のもとに、太一の母親の名で薔薇の花束が届けられたのだった。

太一のせめてもの心づかいである。けれど千津子はそれを姑の気持だと受けとめ、いわれなき仕打ちを恨まずに、和解する日の来るのを信じて息子の妻としての分を尽くしてきた。

そんな彼女の誠意が通じたのかもしれない。初めは敷居もまたげなかった鎌倉の家にも、息子の弘二が生れたところから出入りを許され、現在では親子三人、一応門はくぐれる。

しかし、何があっても、こちらの家には来てもらえず、千津子の扱いにも、義兄の嫁とは歴然とした差があった。

日頃姑が他意なく洩らすように、義兄和明の妻浩子と自分とでは比較の対象にすらならない。片方は大学病院勤務の夫に代わって浅倉医院を守る女医だし、自分のほうは高校中退の水商売あがりなのだから。ことさら卑下したりはしないが、世間の常識から眺めても、同等にと望むことさえが無理というものであろう。

だが、たとえば意に染まぬ嫁であっても、心の半分くらいは開いてほしい。千津子はそう願

続けていた。

真紅の薔薇で飾った錫婚式のささやかな祝宴の場に、姑と義兄夫婦が加わってくれたらどんなに嬉しいだろうか。

ないものねだりに似た感情が湧いてくるのを首を振って払い、千津子は背後に控える若い女店員を目顔で呼んだ。

「赤い薔薇を、そうねえ、二十本ください」

「毎度ありがとうございます。おつかいものでございますか」

「いいえ、祝いごとがあるの。豪華に見えるよう活けたいんだけど」

「それじゃ、開き加減のほうがよろしゅうございますね。青いものを混ぜて一応の体裁を整えておきましょうか」

愛想のいい娘は早速てきばきと選びはじめた。店員教育の行き届くこの店では、下手に注文をつけるよりも任せたほうがよかった。

娘が見繕ってくれている間、千津子は片隅に追いやられている菜の花に眼をそそいだ。華やかで派手な薔薇もいいが、本当は慎ましい野の花が好きなのだ。

と、その時だった。ぽんと背中を叩かれて、千津子とはとびあがった。振りむくと、意外にも夫の太一が笑っている。

「お茶でももうか」

「どうしたの一体。どこか工合が悪いの。それとも間^{*}がもたなくて、また早退してきたの」
たたみかけて問う千津子に、太一は苦笑した。

太一は大手造船会社の設計技師だった。が、造船ブームと呼ばれた好景気を逆撫でたあの石油ショック後、不況の翳り濃く、彼の会社でもほとんど新造船の受注がなくて、合理化計画の名のもとに人員の減量作戦が開始されていた。ただ、太一の場合は現場の人間と異なり、将来にそなえての技術者の温存という意図もあって、配置転換にはならずにいた。しかし、不眠不休で眼を血走らせていた数年前とは一変して、無聊をかこつ毎日である。照る日曇る日さ、と彼は泰然自若を装っているが、時おりやりきれなくなるらしく、こうして陽の高いうちから退社してくる。

仕事をもぎとられた男の辛さ、哀しさが判るゆえに、千津子はそういう夫を責められず、知らん顔をしていた。

「今日はどんな口実でぬけだしたの。母校の研究室との情報交換？」

「いや、じつは、少々頭痛がすると」

「あきれた。仮病を使ったの」

声をひそめた千津子は、がっちりと肩幅の広い長身の夫を見あげた。

「仮病じゃないさ。締めつけられるように痛かった」

うそ、と笑いながら睨み、

「あのおいくらかしら。主人が払うそうですから」

と、千津子はすまして店員を招いた。

とたんに渋い顔をした太一にぶっと吹きだしかけた娘は、すぐにもとにもどって金額を告げた。

情なさそうに一万円札を出した太一を横目に、千津子は薔薇の花束をかかえこんだ。

やさしくて頼もしい夫がいて、腕白だが伸び伸びと育った息子がいる。そして、家族水いらずで、十回目の結婚記念日を祝える。これ以上の幸福がほかにあるうか。少しぐらい姑に冷めたくされたからといって不満に感じては、それこそ罰があたる。千津子は素直に思った。

揃って花屋を出たふたりは、隣りの喫茶店へ入った。千津子には久しぶりの雰囲気だ。ほろ苦いコーヒーの香に娘時代をふと甦らせて、彼女は胸のときめきをおぼえた。

太一はと見れば、いつになくぶすっとして眉間に縦じわを寄せている。奥の一隅にむかいあっても表情は変わらなかった。

「アメリカンでいいのね」

「うん」

生返事をした太一は、椅子の上に無造作に置いた赤い薔薇に眼を当てたまま、拳で後頭部を軽く叩いている。

「ねえ、ほんとうに頭が痛いの」

「いや」

「じゃ、お愛想でいいから、楽しそうにしてよ」

「ああ」

「美女を前にして、失礼よ」

「美女って誰さ。おまえか」

「ほかにいる？」

平日の午後だから客の姿はちらほらだった。彼等はピアノ曲が低く流れる店内の落着いたムードにとけこんで、語り合う声もひめやかであった。

わざとゆっくり広い店内を見渡した太一は、表情をやわらげて白い歯をこぼした。笑うと三十七歳とはとても信じられない童顔になる。一本気の熱血漢で、そのくせ人一倍淋しがりやの彼に似合わしいい笑顔だ。

本物の病氣かと心配しかけた千津子は、ほっと安堵した。

「千津子、おふくろから電話があったよ」

そう太一が切り出したのは、コーヒーが運ばれてからであつた。芳香を愛でていた千津子は少し緊張してカップを置いた。

「案の定だ。息子夫婦の錫婚式より、歌舞伎のほうがいいそうだ」

「そう」

「これみよがしに兄貴たちまで誘わなくなつていいじゃないか。どこまで意地を張りや氣がすむんだ。たかが町医者の方際で、家風に染まぬだつてさ。馬鹿馬鹿しくて、お話にならんよ」

「あなた」

「電話口で怒鳴つてやったよ。身動きができなくなつたら人手がいるだろうから、千津子を送りこんで、いびり殺してやるぞつて」

「いやあねえ。お姑さま、氣を悪くなさるじゃないの」

「眼には眼を、だよ。あの頑固ばばア」

「いいのよ。最初から期待していなかったもの。いっしょに祝つていただこうなんて、虫がよ

すぎたのよ」

「……………」

「子を持って知る親心っていうけど、わたしも弘二を生んで初めて判ったの。わたしだって、弘二がろくに教育もないパー勤めの娘と結婚するっていったら、やはり抵抗があるわ。息子にふさわしい娘は、ほかにいくらでもある。そう思ってしまう」

「千津子」

「好きな人は自由に選べるけれど、自由に結婚はできないのよ。それが世の中」

「後悔しているのか。俺と結婚したのを」

「とんでもない。後悔していたら、こんな散財はしません。がっばりへそくって、さっさと遁走するわよ」

「こいつ」

同時に笑いだしたふたりに、座席に沈みこんでいた客たちが背を伸ばしてふりむいた。その顔の険しさからして、どうやら真昼の密会を楽しむ不心得な中年男女と映ったらしい。

「気にするなよ」

「え？」

「おふくろはとくに折れている。ただ、気位の高い家付き娘だから、自分から頭を下げる訓練ができていないだけさ。おまえには他人行儀のお客さん扱いだが、帰ったあとで浩子ねえさんに必ずいうそうさ。人の値打ちというのは氏素姓じゃない、持って生れた心根だって」

「そうですか」

「もうちょっと辛抱してくれよな。いまにきつと説き伏せてみせるから」

「ありがとう。急がば廻われよ。気長に待つわ」

「気にしていないというふうに微笑して、千津子は冷めかけたコーヒを口に運んだ。

「もうひとつ、話が、いや相談があるんだがな。少々難題なんだ」

「それで、誘ったりしたの。おかしいと思った」

「じつは、会社を辞めようと思うんだ」

「えっ」

「会社に不満があるからじゃない。居心地が悪いわけでもない。大学時代から憧れて、入るならあの会社、と粗末な頭ふりしぼって勉強して、やっともぐりこめたんだ。できるなら、定年までいたい。

だがな、俺は仕事がしたい。船を造りたいんだ。それも、あした、あさつてにだ。硝子ばりの快適な部屋に閉じこめられて、ふたたび来るその日にそなえて、どうぞ存分にご研究に勤しみくださいじゃ、とても耐えられないんだ。これじゃ毎日が蛇の生殺しじゃないか。いっすすばつと止めを刺されたほうが、ずっと気が楽だ」

太一は入社以来、陽のあたる場所を暮進してきた。血の気が多く喧嘩早いから年中上司や同僚とぶつかっていたが、それでも将来の旗手として一目も二目も置かれる存在で、それに見合う場を与えられていた。彼が主軸となつて設計した客船やタンカーはいまも七つの海を駆けめぐっている。だが、ブームの夢潰えたのちの社内に彼の活躍する場所はない。処遇もいままで通り、むしろ以前に増す厚遇だが、仕事に命を賭ける男にとっては、人並以上の昇給も地位も、

ただ焦燥の種でしかないのかもしれない。

「辞めてどうするの」

「牛どん屋でもやるさ」

「やれるの、あなたに」

「わからん。だが、何をしたって、いまよりはましだ」

吐き捨てた太一は、みつめかえす千津子の視線をさけるように煙草に火を点けた。

「おまえには判らんだろうな。天下の五条造船を捨てて、浪人稼業をやるうという俺の気持が」

「ええ、判らないわ」

「会社公認で遊ばせてくれて、なしくずしに日を送っていきや、給料もくれる。課長の椅子も用意してくれる。まさに、おんぶにだっこ。そのうえ、乳母日傘だ。それなのに何が不足だ。

そういいたいだろう」

千津子は黙っていた。無言のまま、真紅の薔薇を凝視したきりだった。

「辞めて、この先どうやって暮らすの。わたしと弘二を路頭に迷わす気。そうもいいたい筈だ。ちがうか」

太一は低い声でいって、ちょっと顔をゆがめた。千津子はこたえない。脇の薔薇に手を伸ばして、包装紙からはみだしている緑の葉を弄んでいた。

「男には誇りつてものがある。仕事を奪われ、生涯賭ける夢を叩き潰されて、しかもなお、夢にすがって飼い殺しにされる。それに甘んじて生きてゆくなんて、俺の誇りが赦さない。生活のことは心配しなくていい。土方をしたって養ってみせる。千津子、お願いだ。俺に、男の意